国際交流を促進するスポーツツーリズムの計画と実践

内　田　和　寿

Ⅰ　はじめに

日本政府は、観光先進国を目指し、2016年に観光庁が「明日の日本を支える観光ビジョン」を策定した。その中では、訪日外客数の増加を狙い、ビザの緩和、出入国管理体制の充実、LCCを含む航空ネットワークの拡大等により、2012年から2015年にかけて訪日外客数が2倍（836万人→1974万人）に成長したことが示され、新たな目標として2020年に4,000万人の訪日外客数を目標として掲げている。日本政府観光局（2019）の調査では、2018年の訪日外客数は3,119万人で、過去最高の記録となっており、2019年度も増加の傾向にあることから、2020年の目標を達成するために、様々な具体的施策が実行されようとしている。

具体的施策の実現に大きくかかわる旅行業界では、外国人による訪日旅行をインバウンドツーリズムと呼び、様々なツーリズムが行われている。例えば、アニメや漫画の作品の舞台となった土地や建物を聖地と崇め巡礼するアニメツーリズムや、寺社仏閣、教会や修道院などを巡礼する宗教ツーリズム、ご当地グルメやB級グルメを観光資源とするフードツーリズム、スポーツを観光資源とするスポーツツーリズムなど様々である。このようなインバウンドツーリズムについて、先行研究では原田・木村（2009）が、国際親善だけではなく、日本の文化と歴史に対する理解を促進し、外貨の獲得や地域経済の活性化にもつながることを指摘している。

本研究では、様々なツーリズムからスポーツツーリズムに着目する。その理由は二つあり、まずは、2020年に東京でオリンピック・パラリンピックが開催され、前年である2019年には、プレ大会としてさまざまなスポーツの世界大会が日本で開催されることから、スポーツツーリズムが研究として注目されている点である。次に、スポーツツーリズムによる訪日外客数の増加が、メガスポーツイベントに依拠する一過性のものにならないよう、旅行業界がスポーツツーリズムを企画するだけではなく、地域や教育機関が主体となったスポーツツーリズムについてニーズが発生している点である。

そこで、観光庁（2011）が推進するスポーツツーリズムと、文部科学省（2017）が掲げる教育目標の一つであるスポーツへの意識を高め、他者への共感や思いやりを学び、国際交流、国際平和に寄与する態度を身に付けることを包含した、大学におけるスポーツを核とし、国際交流の教育プログラムを取り入れたスポーツツーリズムについて検討していくこととする。大学のスポーツによる国際交流やインバウンドのスポーツツーリズムは、拙稿（2018）より、その多くは大学体育会の単体運動部による交流であり、スポーツの競技力向上を主目的とする練習試合や合同練習が主な内容となっていることを指摘している。そのような現状で、単体運動部の活動から発展した顕著な事例としては、2018年に、鹿屋体育大学が鹿屋市と連携してタイ王国の女子バレーボール代表チームと国際交流を行ったことが挙げられる。この取り組みは、鹿屋体育大学の女子バレーボール部が国際交流で合同練習や練習ゲームを行う活動だけでなく、大学のスポーツパフォーマンス研究センターの協力によりタイ代表選手の体力や動作測定を行う活動や、鹿屋市の職員によるイベントや観光ツアーなども組み込まれたスポーツツーリズムとなっており、先駆的な事例であるといえる。

では、大学において、スポーツによる国際交流やインバウンドのスポーツツーリズムは、強豪の運動部にしかできない活動であるかというと、そうではないと言うのが筆者の主張する内容である。そのため、本学で実際に行ってきたスポーツツーリズムの計画と実践の事例をもとに、論考を進めていく。

Ⅱ　本学におけるスポーツツーリズムの取り組み

本学では、2015年度よりインバウンドのスポーツツーリズムを計画し、実践している。スポーツ強豪大学が行う内容とは異なり、青少年の教育活動を意識し

た誰でも気軽に参加できるスポーツを核とした活動を意識したグラスツールレベルの活動である。大学が実施するこのようなスポーツツーリズムの特長は、拙稿（2015）より、人的資源が豊富であることと施設が充実していることが挙げられる。人的資源とは、実施するスポーツ種目を経験したことのある学生、応援・観戦する学生、スポーツを専門とする教職員、外国語を専門とする教員、日本文化を専門とする教員、国際交流のスタッフといった様々な人を指し、この人たちがネットワークを形成することで魅力的なコンテンツを企画することができるのである。また、大学の様々な施設を使用することはインバウンドのビジターにとって費用の削減につながる。例えば、スポーツ活動に必要な体育館の使用料が削減され、大学の食堂を使用することで食費が削減される。大学に宿泊施設があれば、宿泊費も削減される。

また、ビジターの大学施設使用は開かれた大学をアピールすることにつながり、利用者のSNS等による情報発信により、海外への宣伝効果も期待されることから、大学にとっても有益な活動となる。

以上のような考えをもとに実施してきた活動を経年でまとめると次のようになる。

表1をもとに2015年の活動から順にみていくこととする。本学におけるスポーツツーリズムのビジターはバレーボールの団体がほとんどである。これは筆者がバレーボールの国際指導資格を有し、海外とのネットワークがあることと、日本のバレーボール指導に対する海外指導者の興味関心に拠るものである。しかし、本学ではバレーボールを高いレベルで実施する学生がいないことから、ビジターの訪日目的の一つである競技力の向上については、他大学のバレーボール部に協力依頼を行った。

2015年に来学した香港チームは、2018年度の国内リーグで準優勝、2016年に来学したインドネシアチームは選手の多くがナショナルメンバー入りし、2017年の東南アジア大会で準優勝という競技レベルであ

表1　本学におけるスポーツツーリズム実施年表

年度	対象国	団体	年代	スポーツ活動	教育活動	学園協力者との活動	学外協力者との活動
2015	香港	バレーボールクラブチーム	大学生・社会人	科目「スポーツ実技Ⅰ」に参加（ソフトバレーボール）／こども教育学科の学生とバレーボール交流	こども教育学科の学生ガイドによる京都観光	国際交流センター主催パーティー／煎茶部との交流／京都光華高校バレーボール部と練習	龍谷大学女子バレーボール部と交流 / 京都外国語大学バレーボール部と交流／山城高校バレーボール部と交流
2016	インドネシア	バレーボールクラブチーム	大学生・社会人	科目「スポーツ実技Ⅰ」に参加（バレーボール・バドミントン）	こども教育学科の学生と日本文化体験（けん玉、コマ、だるま落とし）	煎茶部との交流／京都光華高校バレーボール部と合同練習	京都外国語大学と交流（英語によるコミュニケーション活動）／京都華頂大学バレーボール部と交流
	マレーシア	家庭婦人バレーボール	高校生～社会人	バレーボール大会を開催。こども教育学科でチームを編成して参加			京都外国語大学バレーボール部と交流
2017	香港	バレーボールクラブチーム（3名）	大学生	こども教育学科学生有志とバレーボール交流	こども教育学科の学生と消防署見学		こども教育学科学生、京都外国語大学バレーボール部と合同練習／佛教大学女子バレーボール部と交流
2018	香港	中学校	中学生	本文で詳細を解説			
	タイ	スポーツスクール選抜	中学生				
2019	フィリピン	サッカークラブ	中学生男子	こども教育学科学生による通訳、活動サポート		光華小学校　グラウンドの使用	京都外国語大学サッカー部との交流

る。そこで、本学での活動内容はスポーツによる国際交流と教育活動を強化した。スポーツ交流は、科目「スポーツ実技Ⅰ」でビジターと学生が一緒に活動を行った。教育活動では、こども教育学科の学生がガイドを務め観光案内を行ったり、日本文化の体験として、けん玉、コマ、だるま落としを学生の解説付きで共に実施したりした。この二つの教育活動に共通することは、本学の学生が事前に準備を行った点である。準備とは、言い換えると事前学習である。喜んでもらうためにはどうしたらよいかを学生自らが考え、事前に調べたり、勉強したりしたことが意欲的な学びにつながり、相手を思いやる心を育むことにつながったといえよう。

2016年のマレーシアの団体についてのツーリズムは、京都外国語大学との連携企画である。マレーシアの家庭婦人の団体が日本へ旅行する際、バレーボールの交流も行いたいという要望に応え、バレーボール大会を企画し、マレーシアの家庭婦人チーム、日本の家庭婦人チーム、京都外国語大学チーム、本学の学生有志チームによる大会を開催した。家庭婦人の数少ないインバウンドのスポーツツーリズムの事例である。

2017年は、団体ではなく、少人数のビジターを対象にスポーツツーリズムを行った。少人数のビジターとの交流は、他大学との交流が練習に参加という形で容易に行われ、移動の交通費を抑えることもできた。また、教育活動として、本学こども教育学科の教員協力のもと、学生とともに消防署を見学するというビジターにとって貴重な体験を提供することができた。

2018年の取り組みは、次章以降で述べることとし、ここでは説明を割愛する。

2019年は、初めてバレーボールの団体ではなく、サッカークラブでなおかつ男子中学生という団体のスポーツツーリズムについて計画と実践を行った。ビジターが男子中学生ということもあり、本学の特色を生かした教育活動の実践には至らなかったが、学生の案内により本学の学食を使用し、光華小学校や他大学に協力いただきサッカーの練習を行うことが実現した。相手を取捨選択するのではなく、どのようなビジターに対してもできる限り期待に応えるべくツーリズムを計画して実践することは、多様性を受け入れる教育につながるととらえ、今後も挑戦していきたい事案であるといえる。



図1　2015年のスポーツ交流　拙稿（2018）より



図2　2015年　学生の案内による観光　（筆者撮影）



図3　2016年　スポーツ交流　（筆者撮影）



図4　2016年　煎茶部との交流　（筆者撮影）



図５　2016 年　マレーシアとの交流　（筆者撮影）

Ⅲ　2018 年の事例１（香港の生徒との交流）

2018 年の香港、タイの事例はそれぞれ、ビジターの団体が中高生を中心としていることから、スポーツツーリズムに教育的内容を多く取り入れることを心掛け、大学の教員がスポーツ指導や講義を行ったことが特徴である。ここでは、香港の事例について概観する。

このスポーツツーリズムは、７月上旬に、香港の基督教中国布道会聖道迦南書院という中高一貫校の生徒に対して実施された。生徒は全員バレーボール部に所属しており、京都観光や伝統文化体験だけではなく、バレーボールでも日本の学生と交流がしたいということで計画したプログラムである。核となるバレーボール活動は、本学の学生有志でチームを結成し、京都外国語大学と連携してゲーム形式の練習を行う活動（図6）と筆者がスポーツ実技の授業を生徒対象に行い、様々な日本式の練習を体験する活動（図７）を行った。

次に、教育的内容について述べる。今回は、新しい取り組みとして書道と折り紙の体験を取り入れた。本学こども教育学科の国語を専門とする教員と連携し、小学校教員を目指す学生の「プレゼミⅠ」という大学の講義に香港の生徒を招待し、交流を深めた。書道は、参加者全員で書を楽しみ、大学生は、書道について人に指導することで学びを深めることと、英語コミュニケーション、ホスピタリティについて学ぶことを主なねらいとして実施した。まずは、香港の生徒１人を２人の大学生がサポートして、筆の持ち方や書き方について説明し、筆の使い方の模範を示した。そのあと、香港の生徒は、半紙の下にお手本の字が書かれている半紙を敷き、上からなぞって、筆の使い方を学んだ（図8）。漢字は香港でもなじみの文字であることから、生徒は戸惑うことなく活動に取り組むことができていた。筆の使い方に慣れてきたら、次は、メッセージカードの作成を行った。これは、絵をかいたり、字を崩したりして、自由に書を楽しむ活動であり、生徒と大学生はコミュニケーションをとりながら笑顔で活動を行った（図９）。

折り紙を通した活動は、折り紙を得意とする本学の３年生有志が２か月前から企画をして、香港生徒の来学を歓迎する活動であった。大学生が実物投影機を使って折り方をゆっくり説明し、サポートする大学生が香港の生徒の隣に座り、鶴と彦星を折り紙で一緒に折った（図 10）。活動の最後には、香港の生徒が書した作品を色紙に貼ってプレゼントし、参加者全員で記念撮影を行い、交流を終了した（図 11）。



図６　2018 年　本学学生と香港生徒のゲーム（筆者撮影）



図７　2018 年　筆者によるスポーツ指導　（筆者撮影）



図 8　2018 年　香港生徒の書道体験　（筆者撮影）



図 9　2018 年　香港生徒によるメッセージカード作成（筆者撮影）



図 10　2018 年　香港生徒による折り紙体験（筆者撮影）



図 11　2018 年　香港生徒と本学学生　（筆者撮影）

Ⅳ　2018 年の事例 2（タイの生徒との交流）

2018 年は、7 月の香港の生徒に続き、12 月にタイの生徒を対象としたスポーツツーリズムを実施した。ここでは、タイの事例について概観する。

タイの団体は、タイ国内のスポーツスクールから選抜された指導者と生徒（中高生）により構成され、タイ教育省のスポーツプログラムの一環として、日本の大学生や高校生とのバレーボール活動を通して競技力向上を図り、教育活動、文化活動等を通して生徒の教養を養うことを主な目的として、10 日間の予定で日本へ派遣されてきた。その受け入れを本学が行い、10 日間のスポーツツーリズムを筆者が計画し、実践した。

表 2 をもとに内容についてみていくと、核となるバレーボールの活動は、筆者の指導と本学学生のサポートによるバレーボールの練習を 3 回と講義を 2 回、他大学や中学高校のバレーボール部との交流、外部講師による講義と実技指導、関西地区大学選抜チームとの交流といったように、理論と実践の両方を学ぶことができ、バレーボールの競技レベルや年代も様々なカテゴリーと交流できるプログラムとした。

加えて、スポーツに関するプログラムとして、科目「スポーツ実技Ⅱ」への参加と、本学でフィットネスの授業を担当する教員と連携し、エアロビクス実技を実施した。スポーツ実技Ⅱの授業では、タイの生徒と本学 1 年生がともに活動し、混成のチームを編成してソフトバレーボール大会を行った（図 12）。エアロビクス実技では、ポールを用いたストレッチやボックスを使ったステップ運動が紹介され、タイの生徒にとっては初めて体験する運動であったが、興味深く熱心に取り組んでいた（図 13）。

表 2　スポーツツーリズムの内容

日	曜日	9:00-10:30	10:30-12:00	12:00-13:30	13:30-15:00	15:30-17.00	17:00-18:00	18:00-19:30	会場
13	thu	日本へ到着　ホテルへ移動							
14	fri	10:00 ～ 12:10 バレーボール実技 1		12:10 ～ 12:20 記念撮影	昼休憩	14:30 ～ 16:30 外部講師による講義 1	移動	18:00 ～ 20:00 京都華頂大学と親善試合	京都光華女子大学／京都華頂大学
15	sat	10:00 ～　関西地区大学選抜チームの練習見学及び練習参加					移動		千里金蘭大学
16	sun	10:00 ～　関西地区大学選抜チームの練習見学及び練習参加						移動	千里金蘭大学
17	mon	近畿日本ツーリストによる京都観光							
18	tue	近畿日本ツーリストによる京都観光			13:30 ～ 15:30 バレーボール講義 1	16:00 ～ 18:30 山城高校と合同練習、ゲーム			京都光華女子大学／山城高校
19	wed		10:40 ～ 12:30 バレーボール実技 2		昼休憩	14:30 ～ 16:00 外部講師による講義 2	16:15 ～ 17:45 バレーボール実技 3	18:00 ～ 19:00 外部講師による講義 3	京都光華女子大学
20	thu	9:00 ～ 10:00 エアロビクス実技（本学教員、学生）	10:30 ～ 本学の科目「スポーツ実技Ⅱ」に参加	昼休憩	13:30 ～ 京都光華高校との文化交流	15:30 ～ 17:30 京都光華高校との合同練習及びゲーム			京都光華女子大学／京都光華高校
21	fri	9:00 ～ 10:10 日本文化講座（本学教員、学生）	10:30 ～ 11:30 バレーボール講義 2	昼休憩	13:30 ～ 15:20 外部講師による講義 4	15:40 ～ 17:20 京都外国語大学学生とのバレーボール交流			京都光華女子大学／京都外国語大学
22	sat	赤穂市へ移動	10:30 ～ 11:30 外部講師による講義 5	昼休憩	13:00 ～ 16:00 関西福祉大学バレーボール部、中学生とのバレーボール交流				関西福祉大学
23	sun	タイへ帰国							



図 12　2018 年　タイ生徒と本学学生のスポーツ交流（筆者撮影）



図 13　2018 年　タイ生徒のエアロビクス体験（筆者撮影）

また、香港の生徒に好評であった書道と折り紙の体験も、再度プログラムに組み込んだ。書道について今回は、タイの生徒が筆ペンを使用することが初めてであることから、まずは、国語を専門とする教員が筆ペンの持ち方、太い文字、細い文字の書き方を解説し、本学の学生がサポートしながら、お手本の文字を書写する活動をスタートした。図 14 は、道という文字を書写している場面である。タイの生徒は漢字を理解していないので、道という字が横になっていることがわかる。学生は、ここで向きが間違っていることを注意するのではなく、筆順にこだわらず、とにかくお手本をよく観察して真似ることを到達目標にサポートし

た。とめ、はね、はらいという書道の用語はわからなくても、タイの生徒はその個所をしっかり観察し、悪戦苦闘しながらも、感性の豊かさが感じられる作品を仕上げていった。(図 15)。

折り紙の体験では、鶴の折り方を紹介した。まず、本学の学生が鶴は日本を象徴する鳥であることと、千羽鶴に込められる願いについて解説を行った後、鶴を一緒に折った（図 16)。

タイの生徒にとっては、本でしか見たことがなかったものを実際に体験することで学びが深まり、本学の学生にとっては、海外の人に教えることで、日本の文化について見つめ直す機会になったといえよう。

このスポーツツーリズムに関して、後日、タイの教育大臣より本学こども教育学科宛に感謝状をいただいた。また、この活動は大学新聞（2019）に取り上げられた。つまり、本学のこども教育学科が計画して実践したこの 10 日間のプログラムが、教育研究活動として社会的に一定の評価を得ることができたといえる。



図 14　2018 年　タイ生徒の書道体験　（筆者撮影）

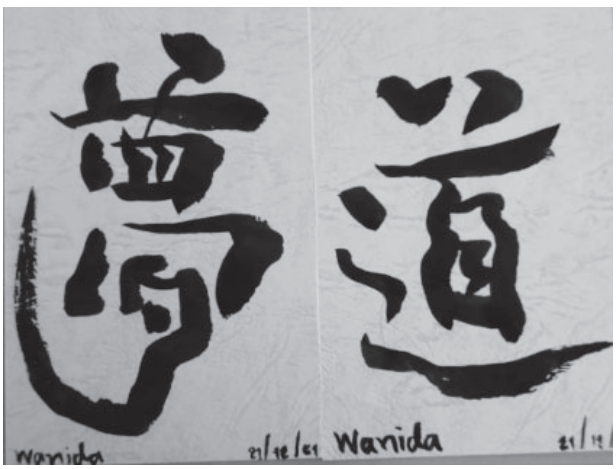


図 15　2018 年　タイ生徒の作品　（筆者撮影）



図 16　2018 年　タイ生徒の折り紙体験　（筆者撮影）

V　考察

インバウンドのスポーツツーリズムを計画するうえで、原田・木村（2009）は、そのマネジメントにおいて、①「受け入れ体制づくりの確立」、②「スポーツ・ヘルスツーリズム商品の複合化への対応」。③「リピーター定着のためのブランド力とホスピタリティの充実」の 3 つが重要であると指摘している。ここでは、①と③を本研究の評価の視点として、この 2 つの切り口から本学で行ってきた経年活動を省察していく。

まず、受け入れ体制づくりの確立について考察していく。本学でのスポーツツーリズムの受け入れの窓口は筆者であり、バレーボールの活動を核として、どのような教育的活動が可能であるかを、学内においてこども教育学科の教員や、学生サポートセンター、国際交流センターに相談していく流れである。また、中学高校や小学校との連携も視野に入れて計画を立案している。5 年間継続して行ってきたことで、活動内容についてもお互いの理解が深まり、非常に好意的に多くの方々に協力いただける体制になってきたと感じている。活動に関わる学生については、有志を募ると一定の数が集まるようになり、主体的に学生たちで集まって活動の準備や予習をする光景も見られるようになっている。

本学以外での活動プログラムについては、特にバレーボールの強化を目的とするビジターには、本学ではその要求に十分に応えることは困難であると判断し、他大学や高校を紹介することで対応した。大学や

高校のバレーボール部にとって、バレーボールによる国際交流は、興味関心があり行ってみたい活動ではあるものの、なかなかそのような機会がないのが現状であることから、表1で示したように非常に多くの大学、高校に協力いただいている。

受け入れ体制についての懸念事項を挙げると、訪問の時期によっては十分な体制が取れないことである。海外と日本の大学で長期休暇の時期が異なるため、ビジターがバレーボールの活動をたくさん取り入れてほしいと要望した際に、日本の高校はテスト期間で練習は休みであったり、大学は授業があるので夕方しか練習できないということが起きる。また、ビジターが日本の大学の授業に参加したり大学生と一緒に交流を深めたりしたいと要望した際に、大学は夏休みで授業がなく、有志の学生しか集まらないということも起きる。つまり、受け入れ側として、プランニングの際にできること、できないことをしっかり相互確認することが重要である。

次に、リピーター定着のためのブランド力とホスピタリティについて考察していく。2015年に来学した香港の団体とは現在でも交流があり、2017年に来学した3名はリピーターである。そのため、顔を覚えている学生もいて、再会を果たすことができた。団体での来日は、メンバー全員の日程調整や航空チケット・宿泊施設の確保に苦労することがあるが、少人数での旅行はその心配がなく、気軽に旅行を楽しむことができる。香港の学生は、日本へ来たことは過去にあるが、観光目的であり、2017年にバレーボール活動と教育活動を組み込んだ個人向けのスポーツツーリズムを提供できたことは、学生ビジターにとって新しい訪日目的となった。2017年には京都外国語大学のバレーボール部が香港でアウトバウンドの交流を行ったり、2018年、2019年も本学での活動は日程上かなわなかったものの、少人数の学生が関西を訪れ、スポーツツーリズムを実践したりしている。

また、直接のリピーターではないが、本学でのスポーツツーリズムをビジターがそれぞれSNS等で情報発信することや、海外の指導者間ネットワークで情報が拡散されることで、ぜひ活動を計画してほしいという問い合わせが筆者の友人の友人という関係性の団体からも来るようになった。2018年の香港の団体はまさにその例である。さらに、2019年のフィリピンの団体はバレーボールのチームではなく、サッカーのチームであった。活動について柔軟な対応ができるのは、大学が計画して実践するスポーツツーリズムの強みであるといえる。ブランド力が構築できたとは言い切れないが、本学のスポーツツーリズムが独特なものとしてアジア圏のバレーボール関係者を中心に少しずつではあるが認知されてきており、リピーターと新しいビジターの獲得が期待される。

そのビジターの満足度を高め、また来たいという気持ちを喚起するには、ホスピタリティが重要であることは言うまでもない。ホスピタリティは、心の奥底から湧き出てくるおもてなしの心を具現化した行動や行為ととらえることもできるが、国際交流の経験がない学生にとっては、おもてなしをしたい気持ちはあるが、何をしたら相手が喜ぶかがわからないという状態も起こりうる。つまり、ホスピタリティに関する事前教育が必要となるのである。2015年は、学生の案内による京都観光を実施したが、当日を迎えるまでに、社会科を専門とする教員と英語を専門とする教員の指導のもと、学生が主体的に英語によるガイドブックの作成と、どの観光地を巡るかについて議論を行った。スポーツ活動については、事前教育として香港についてとビジターの概要を説明し、たとえ言葉が通じなくてもスポーツ活動は一緒に楽しむことができるので、とにかく積極的にビジターにかかわることが歓迎の気持ちとして伝わることを助言して当日を迎えた。

上記のように、ホストとなりビジターにかかわる関係者にホスピタリティが生じるのは当然といえば当然である。ここでは、その当事者間以外からのホスピタリティ、換言すれば第三者によるホスピタリティについても触れておきたい。ビジターが訪問を歓迎されていると感じるためには、受け入れ体制の窓口は筆者個人であっても、活動について多くの人に知っておいてもらうことが鍵になるのである。たとえ活動に直接かかわらない人であっても、今、学内に海外からビジターが来て交流活動を行っているということを知っていれば、ビジターとすれ違った際に声をかける機会もあるだろうし、ビジターがトイレを探して困っていたら声をかける機会も生まれるであろう。実際に、学内のショップで言葉がうまく通じなくて困っていたら、学生が助けてくれて感激したとビジターから報告を受けた。

このような、直接かかわらない第三者から受けたホスピタリティは、スポーツツーリズムの活動内容に対してではなく、本学に対しての印象につながることから、本学で海外からのビジターを受け入れる際には、できるだけ多くの人に情報を伝えるように努めることが、ホスピタリティの輪を広げることにつながるのである。2018年にタイの団体が活動した際は、当時学長の一郷先生と副学長の若井先生が体育館に駆けつけてくださり一緒に記念撮影を行ったことで、大学を挙げて歓迎されていると感じたとビジターの指導者から伺った。また、守衛室とも情報を共有していたため、日々、大学の門をくぐってから帰るまでの誘導がスムーズに行われ、安心安全の環境下で活動を実施できたことも印象に残っていると伺った。このような活動も第三者から受けたホスピタリティととらえることができる。

Ⅵ　まとめ

今後、本学でインバウンドのスポーツツーリズムをさらに推進していくためには、先方のニーズをしっかり把握し、本学の特性を考えて、他では体験できない独自の計画を立案することが肝要である。スポーツの活動については、5年間の活動を通してビジターの様々な要望に応えられる人的ネットワークが形成できているため、十分な受け入れ体制にあるといえる。幸いなことに、日本のチームが行うバレーボールの練習は、規律正しく、レシーブを中心とした守備を鍛えることに優れているという評価を海外から受けており、インバウンドの魅力的なコンテンツとなっている。本学が計画して実践するバレーボールを中心としたスポーツ活動は、観戦型ではなく、参加型で、少人数での参加にも対応できる内容となっていることから、今後も多くのビジターが期待される。

そのビジターのリピートを増やし、新しいビジターを獲得するには、スポーツツーリズムにおいて、スポーツ以外の活動内容も魅力的であることが重要となる。活動計画に様々な教育活動を取り入れ、日本の生徒や学生と一緒に活動することで、日本に関する学びをより深められる点が、本学が行うスポーツツーリズムの強みである。本研究の事例で紹介してきた様々な教育活動を充実させ、新しい分野の活動についても取り組んでいきたい。

Ⅶ　参考引用文献

大学新聞（2019）タイの高校生とスポーツ・文化交流　大学新聞社　第163号

原田宗彦･木村和彦編著（2009）スポーツ･ヘルスツーリズム　大修館書店　112, 203-204

堀繁・来田悟・薄井充裕（2007）スポーツで地域をつくる　東京大学出版会　17-19, 50-59

稲垣正浩・谷釜了正編（1995）スポーツ史講義. 大修館書店　84-86, 151-152

観光庁（2011）スポーツツーリズム推進基本方針 http://sporttourism.or.jp/pdf/sporttourismpromotingbasicpolicy.pdf　2019年9月15日閲覧

観光庁（2016）明日の日本を支える観光ビジョン https://www.mlit.go.jp/common/001126601.pdf 2019年9月15日閲覧

河村誠治（2003）わが国インバウンド・ツーリズムと地方の課題　長崎国際大学論叢　第3巻　11-21

文部科学省（2017）新しい学習指導要領等が目指す姿 2019年9月15日閲覧 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1364316.htm

日本政府観光局（2019）ビジット・ジャパン事業開始以降の訪日客数の推移 https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/marketingdata_tourists_after_vj.pdf　2019年9月15日閲覧

岡野進（2010）概説スポーツ　創文企画　95

内田和寿・横山勝彦（2013）スポーツによる地域活性化―女性のスポーツ活動に着目して―　京都滋賀体育学研究　第29巻第1号　1-11

内田和寿（2015）スポーツツーリズムによる国際交流　香港バレーボールチームを事例として　京都ノートルダム女子大学研究紀要45号　45-57

内田和寿（2016）香港クラブチームのスポーツツーリズム（京都）　バレーボールミーティング報告　2016年8月

内田和寿（2018）大学におけるスポーツ活動を中心とした国際交流　京都光華女子大学こども教育研究第2号　27-33

横山勝彦（2011）スポーツとソーシャル・キャピタル
菊幸一・斎藤健司・真山達志・横山勝彦編　スポーツ政策論　成文堂　336-338